



Title	St Mawrの主題の曖昧さについての一考察
Author(s)	内田, 憲男
Citation	大阪外大英米研究. 1977, 10, p. 69-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99025
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

St Mawr の主題の曖昧さ についての一考察

内 田 憲 男

St Mawr は 1924 年の夏、当時 Lawrence が住居としたアメリカ南西部ニューメキシコ州タオス近くの小農場 Kiowa Ranch で書かれた中編小説であり、この時期の他の作品同様、この土地での体験を色濃く反映している作品である。Lawrence はこの土地について数々のエッセイを書いているが、彼が死の一年余り前に書いた回想風エッセイ “New Mexico” はこの土地が彼にとって如何に重要な意味を持ったかを知るのに格好のものである。この中で彼は「私は宗教的なものとして私の心を打つ何ものかを求めて世界中を探しまわった」と自己の遍歴について回顧すると共に、「私を現代という文明の時代 — 物質的そして機械的發展の偉大な時代から解放し」、「私に宗教感情が永遠のものであることを感得させた」唯一の土地がニューメキシコであったと述べている。¹では、この土地の何が彼にそのような感銘を与えたかと言えば、それはロッキー山脈の荒々しい自然の風景と古来の宗教的な儀礼を伝承するインディアンの姿である。このエッセイの結びの次の文章は、彼が自然に対するインディアンの意識の在り方に自己の宗教観と相通じるものを見い出したことを明らかにしている。

The whole life-effort of man was to get his life into direct contact with the elemental life of the cosmos, mountain-life, cloud-life, thunder-life, air-life, earth-life, sun-life. To come into immediate *felt* contact, and so derive energy, power, and a dark sort of joy. This effort into sheer naked contact, *without an intermediary or mediator*, is the root meaning of religion....²

宗教の根本的な意味をこのように考える Lawrence が、人間の心臓を太陽に捧げることによって太陽との直接的な関係を希求したアズテック人の供儀を正に宗教的なものであると理解し、また彼らを祖先に持つ（と Lawrence が考えた）ニ

ニューメキシコのインディアンが彼に「現存する最も深く宗教的な民族の生き残りである」³と思えたのも当然であろう。

しかし Lawrence のインディアン体験について等しく重要なのは、彼がインディアンの秘義に魅せられるのと同時に、自分自身を彼らから遠く隔たった存在として眺めていることである。彼らとの最初の出会いを綴ったエッセイ “Indians and an Englishman” の中で、彼は、種族の伝説を物語る彼らの声に原始的な世界への郷愁を呼び起されながらも、過去を再び生きる必要はない、またそのことを望みもしないと繰り返し、彼らの儀式へ参加することを拒絶している。⁴

Mornings in Mexico からの次の一節は彼が文明人としての自己とインディアンとの意識上の乗離を深く認識していたことを示すものである。

The Indian way of consciousness is different from and fatal to our way of consciousness. Our way of consciousness is different from and fatal to the Indian. The two ways, the two streams are never to be united. They are not even to be reconciled. There is no bridge, no canal of connexion. ⁵

Lawrence はこのように、一方で、自己とインディアンの意識が互いに相容れないものであるとはっきり認識しながら、他方で、先の引用文に明らかなように、インディアンの意識の在り方が宇宙自然の根源的な生命と有機的な関係を維持している真に宗教的なものであると考えている。そしてこの考え方に見られる彼のアムビヴァレンスがニューメキシコ時代の作品の意味を複雑なものにしている一因であると思われる。

1924年の夏、*St Mawr* に先立って書かれた短編 *The Woman Who Rode Away* はこの Lawrence のアムビヴァレンスがはっきりと現れている作品である。この短編は、インディアンの神秘を求めて山へ出かけた或るアメリカ女性がアズテックの末裔チルチー族の捕虜となり、自分の肉体を彼らの神々の生贄として供するという物語であり、一応、白人意識とインディアン意識の乗離についての Lawrence の認識が「神話」(myth) という形で具体化された作品であると言える。

しかし、この女性の中にマゾヒスティックな自己放棄と自己破壊の感情が明らかに認められ⁶、さらにインディアン⁷の儀式が作者によって是認されているように読み取れることにより、この作品が同時に Lawrence のインディアン的な意識への渴望を表現していることも否定出来ないのである。

St Mawr はいわゆる「荒地」の状態にある英国という文明社会の人間の生活を描くと共に、そういう生活からの救済の可能性をヒロイン Lou Witt と原始的異教世界の関係を通して探求した作品である。もっとも、この作品の舞台はその大半が英国社会であり、原始的異教世界の写実的な描写は作品終結部で描かれるニューメキシコ風景によって与えられるだけである。しかし英国社会を舞台にした場面においても、読者はたえず文明社会に対峙する原始的異教世界の存在を意識せざるを得ない。それは象徴的な種馬 *St Mawr* がそういう世界を「別世界」のヴィジョンとして Lou に啓示するだけでなく、彼女の目には「異種の動物」と映る Phoenix と *St Mawr* に「付随した影」のような馬丁 Lewis といういずれも文明人とは明らかに峻別される奇妙な二人の人物が登場しているからである。メキシコ人とインディアンの混血である Phoenix にとって実在する唯一の世界は生れ故郷アリゾナだけであり、ロンドンは「偽の蜃気楼」か「一種の悪夢」にすぎない。また「土着の英国の魂が未だに残存する」ウェールズの片田舎に生れたケルト人 Lewis にとっても、ロンドンは「一種の牢獄」以外の何ものでもない。

この英国社会において展開されるドラマの中で主役を演じるのは *St Mawr* であり、この象徴的な動物と英国社会を縮図的に示す Lou の夫 Rico Carrington を対比的に描くことによって、Lawrence は英国社会の疲弊のさまを描き出そうとしている。そしてこの意図は Rico が作品冒頭で「主人から後退りする馬」と喻えられていることにすでに現れている。

Rico の性格を最もよく表すのは彼に冠せられる「気取屋」(poser)という言葉であり、彼は社会に合う様々な気取りを凝らすことによって「当世風の肖像画家」として英国社会の中に自分の場所を得る。彼の容貌の描写はそういう人物を描いたものとして実的に的確である。

His face was long and well-defined, and with the hair taken straight back from the brow. It seemed as well-made as his clothing, and as perpetually presentable. You could not imagine his face dirty, or scrubby and unshaven, or bearded, or even moustached. It was perfectly prepared for social purposes. If his head had been cut off, like John the Baptist's, it would have been a thing complete in itself, would not have missed the body in the least. 8

Rico はまた、この引用の最後の文が示唆しているように、官能的な肉体がほとんど完全なまでに抑圧されている男性である。⁹そしてこの肉体の抑圧が彼と Lou の関係を「性愛というよりは神経上の愛着。自然に湧き起る熱情というよりは奇妙な意志の緊張」といった性質のものにしている原因であると言えるだろう。しかし Rico は肉体の抑圧によって返ってそのことが引き起す危険な破壊衝動のために自己の生活を脅かされている人間である。

He was afraid of himself, once he let himself go. He might rip up in an eruption of life-long anger all this pretty-pretty picture of a charming young wife and a delightful little home and a fascinating success as a painter of fashionable, and at the same time 'great' portraits: with colour, wonderful colour, and at the same time, form, marvellous form. He had composed this little *tableau vivant* with great effort. He didn't want to erupt like some suddenly wicked horse—Rico was really more like a horse than a dog, a horse that might go nasty any moment. For the time, he was good, very good, dangerously good. 10

Lawrence はここで Rico を「いつつむじをまげるかも知れない馬」と類推することによって、Rico と St Mawr が極めてよく似た存在であることを示そうとしているように思われる。¹¹ なぜなら彼は St Mawr の潜在的な性質を、Lou

の感じ方を通して、以下のように表現しているからである。

Something told her that the horse was not quite happy; that somewhere deep in his animal consciousness lived a dangerous, half-revealed resentment, a diffused sense of hostility. She realized that he was sensitive . . . and nervous with a touchy uneasiness that might make him vindictive. ¹²

実際 St Mawr は危険な暴れ馬であり、すでに二人の人間に致命傷を負わせた馬としてこの作品に登場している。従って、St Mawr と Rico の相違は、前者の危険な性質は現実の行為になって現れるのに対して、後者のそれは抑えられるということである。Rico は英国社会の中に作り上げた自分の生活を守ることに一心になるあまり、その生活が破壊されることに対する恐れから自己のあらゆる肉体的な衝動を抑圧しようとし、その結果、生活の安定も充足も奪われるという悪循環に陥っていると言えるだろう。Lou が彼は「表面的には非常に幸福」であるように思えるが、心の奥底ではいつも怒っているかのような人間であると感じるのはそのためである。Lawrence が問題にしているのは、この Rico に代表される英国社会の人間の生の在り方、すなわち外面的な生活の維持のために肉体の抑圧ないし歪曲を強いる生の在り方だと言えるだろう。

アメリカ人である Rico の妻 Lou は St Mawr との邂逅によって、英国社会の人間の生活が、何か本質的なものを欠いているために、結局「虚勢」(a bluff)あるいは「態度」(an attitude) に寄り掛からねばならないごまかしのものであることに気づく。

But now she realized that, with men and women, everything is an attitude only when something else is lacking. Something is lacking and they are thrown back on their own devices. That black fiery flow in the eyes of the horse was not 'attitude'. It was something much more terrifying, and real, the only thing that was real. Gushing from the darkness in menace and question, and blazing out in the splendid body

ここで「態度」ではない、「何かずっと恐しい真実のもの」を体現しているように Lou が感じる St Mawr が彼女自身を含む英国社会の人間に対立する存在であることは明らかなだろう。St Mawr に魅入られた Lou は、この馬が文明社会に対峙する「別世界」の存在であることを感得し、この馬の起した事件を二つの相異なる世界の戦いであると理解する。

A battle between two worlds. She realized that St Mawr drew his hot breaths in another world from Rico's, from our world. Perhaps the old Greek horses had lived in St Mawr's world. . . . It was another world, an older, heavily potent world. And in this world the horse was swift and fierce and supreme, undominated and unsurpassed. 14

この Lou の連想、さらには St Mawr の中に古代異教世界の偉大な神 Pan を見ることが出来るという作中人物の神秘家 Cartwright の言葉によって明らかのように、St Mawr は原始的異教世界の生命を体現した象徴的な動物として描かれている。そしてそういう生命象徴として St Mawr は Lou にとって重要な意義を持つのである。そのことは馬丁 Lewis の「動物」のような髪毛がきっかけになって交される彼女と母親 Witt 夫人の会話の中に読み取ることが出来る。ここで Lou は、Lewis の持つ獣性に魅惑されながらも「本当の精神というものが男性において重要であるすべてである」という信念は決して変らない」と言う母親に対して、「男性は彼らの中の野性動物の最後の一片が消え去る時いつも本当に考えることをやめてしまうものです」と反論する。彼女によれば、英国社会の男たちの欠陥は彼らの中の「動物」が「犬のように飼いならされてしまった」か或いは「Rico のように変な悪いものになってしまった」かのどちらかである。無論、彼女の求めているのは「動物」のような生の在り方ではなく、次の彼女の言葉が示すように、彼女は生命の「源泉」との関係の回復を渴望しているのである。

[St Mawr] stands where one can't get at him. And he burns with life. And where does his life come from, to him? That's the mystery. That great burning life in him, which never is dead. Most men have a deadness in them, that frightens me so, because of my own deadness. Why can't men get their life straight, like St Mawr, and then think? . . . And don't misunderstand me, mother. I don't want to be an animal like a horse or a cat or a lioness, though they all fascinate me, the way they get their life *straight*, not from a lot of old tanks, as we do. I don't admire the cave man, and that sort of thing. But think, mother, if we could get our lives straight from the source, as the animals do, and still be ourselves. 15

このように、St Mawr の象徴としてのひとつの積極的な機能は、「自然の生命」そのものを体現することによってヒロイン Lou Witt に英国という文明社会の生の在り方の不毛性を認識させると共に、彼女に生命の甦りの可能性を暗示することにある。

しかし St Mawr のより重要な象徴的機能はその強烈な破壊性に認められる。先の引用文中にあるように、St Mawr の中には「危険な、なかばむき出しになった怒り、あたりにまき散らされる敵意のようなもの」が存在し、それはこの馬の異常な性質、すなわち種馬であるにもかかわらず牝馬を寄せつけないこと、また人間との接触を嫌い、近づいただけで「まるで電光が四つの蹄の中で破裂したかのように」後へ飛びのくことにはっきり現われている。そしてそういう危険な怒り或いは敵意といったものが英国社会の人間に向けられていることは、St Mawr を乗りこなせるのが Lewis と Phoenix という共に「動物」を感じさせる人間であること、また St Mawr がテキサスへ渡った途端、牝馬の後を嗅ぎまわる平凡な種馬に変貌することによって明白である。

St Mawr の破壊性の意義はこの作品の中心的なエピソード、ウェールズの丘陵地へ Rico が St Mawr に乗って、Lou, Witt 夫人、彼の友人と一緒に遠乗

りへ出かけた時に起る事件を通して明らかにされる。一行が目的地、「悪魔の椅子」 (the Devil's Chair) と呼ばれる岩場へ向っている途中、突然 St Mawr が暴れ出し、後脚で立ち、そのまま手綱にしがみついている Rico を下敷にして倒れ、彼に重傷を負わせる。さらに Rico を助けに近づいた若い英国人 Fred Edwards も暴れ狂う St Mawr の蹄でその顔を蹴りつけられる。すぐ後で Lou は石で頭を打ち砕かれた蛇の死体を見つけ、St Mawr が急に暴れ出した原因を理解する。そしてこの後近くの農場へ行く間中ずっと彼女は「悪のヴィジョン」 (a vision of evil) を見つづけるのである。

It was something horrifying, something you could not escape from. It had come to her as in a vision, when she saw the pale gold belly of the stallion upturned, the hoofs working wildly, the wicked curved hams of the horse, and then the evil straining of that arched, fish-like neck, with the dilated eyes of the head. Thrown backwards, and working its hoofs in the air. Reversed, and purely evil.

She saw the same in people. They were thrown backwards, and writhing with evil. And the rider, crushed, was still reining them down.

What did it mean? Evil, evil, and a rapid return to the sordid chaos. Which was wrong, the horse or the rider? Or both? 16

数ページにわたる「悪のヴィジョン」の描写を通して Lawrence が言い表わそうとしているのは、この地上が「悪」の大洪水で覆われていて、人間は誰一人その潮流から逃れる術を持たないということである。Rico をはじめとする英国社会の人間は無論のこと、St Mawr でさえその「引っ繰り返された」姿は「悪」そのものとして Lou の目に映るのである。しかし Lawrence は同時に「どちらが悪いのか、馬か乗り手か、その両方か」という上の疑問を解き明かすかのように、Lou に対して以下の唯一の救済の道を示唆するのである。そしてここに

Lawrence が St Mawr の破壊性に与えている意義がはっきりと現われている。

What's to be done? Generally speaking, nothing. The dead will have to bury their dead, while the earth stinks of corpses. The individual can but depart from the mass, and try to cleanse himself. Try to hold fast to the living thing, which destroys as it goes, but remains sweet. And in his soul fight, fight, fight to preserve that which is life in him from the ghastly kisses and poison-bites of the myriad evil ones. Retreat to the desert, and fight. 17

ここで「無数の邪悪な者共」の一人が Rico であり、また「進行の過程で破壊を行うが、いつまでも健全である生きもの」が St Mawr を指していることは言うまでもない。従って、読者は先の事件について、St Mawr が突然暴れたのは自発的な生命の衝動によるものであり、一方、Rico が手綱にしがみついていたのは St Mawr の自然な衝動を掬い曲げようとした悪しき行為であると解釈せざるを得なくなる。Lawrence はこのように St Mawr の破壊性に極めて積極的な意味を認めているのである。

この事件に対して Rico その他の英国社会の人間、すなわち Rico の女友達 Flora Manby に典型的な「く楽しくやろう」というボール紙製の世界にすっかり閉じ込められた人々は St Mawr は邪悪で危険な馬だから射殺するか去勢しなければならないと主張する。そしてこのような人々 — 「現に生きているものうち（自分にとって）重要でないものは全て崩壊してしまうことを望みながら、自らは肉体上の絶対的な安全さの中で生きて行こうと企んでいる人類の無数の陰謀家」から St Mawr を救うために、Lou は母親と二人の馬丁と共にアメリカへ渡るのである。

さて、作品終結部のニューメキシコの場面について述べる前に、我々はこの作品の孕むいくつかの問題点を考察することによって、St Mawr の破壊性が作者 Lawrence が意図しているほど積極的な意味を持ち得るかどうかを明らか

にせねばならない。まず問題になるのはこの作品における **Lawrence** の英国社会の扱い方である。先の引用文中の **Rico** の生活の描写に如実に現われているように、**Lawrence** は英国社会に生活の場を持つ登場人物を例外なく嘲弄的な筆致で描いており、そのことがこの作品のひとつの大きな特徴になっている。上記の事件の後、**St Mawr** を「片づける」ことを勧めに來た **Vyner** 夫妻の描き方などには作者の悪意といったものさえ感じ取れるのである。無論、読者が **Vyner** 夫妻と意見を同じくするというのではない。ただ作者が **Lou** や **Witt** 夫人と一緒に¹⁸ になって彼らを嘲っていることに異和感を覚えるのである。

また、英国社会がしばしば **Witt** 夫人の視点で描かれていることから解るように、**Lawrence** はこの人物に英国社会の観察者としての役割を与えている。彼女はヨーロッパ社会に「本当の上流社会」を見い出そうとしてそれが果せなかったアメリカの中年女性で、「花の下に蛇を否むしろ蛆を常に探し求める」ような「悪魔的な心理学者」である。彼女は英国人および英国社会に向けて絶えず悪意に満ちた諷刺を投げつけるだけでなく、特に **Rico** に対してはあたかも彼の生活を破壊するかのような行動を取る — **Rico** が **St Mawr** に苦しめられる最初の事件は、彼女が自分の中の「悪魔」を解き放って、言わば **St Mawr** をけしかけた¹⁹ ことが原因になっている。しかし読者は、作者の英国社会の描写が嘲弄的であるために、彼女の毒舌も邪悪な行為もすべて作者によって是認された当を得たものと考えざるを得ないのである。**Lawrence** はこの **Witt** 夫人を肯定してはいない、その反対に彼女の生の在り方を容赦なく断罪している。そのことは彼女が死の願望（death-wish）に取り憑かれた人間であり、またこの作品で積極的な価値を賦与されている **Lewis** への彼女の求婚が無惨な結果に終ることによって²⁰ 明白である。しかし彼女の英国社会に対する攻撃に関しては、今述べた理由から、読者はそのまま妥当な批判として受け取らざるを得ないのである。

以上のことから、**Lawrence** がこの作品において英国社会をアプリオリに諷刺あるいは嘲弄すべき対象として扱っていることは明らかであろう。否、英国社会を断罪していると言った方がより正確なのである。ただ問題は、**Rico** がこのよ

うな作者の観点から描かれているために、単に嘲弄すべき、ちっぽけなつまらない人物にとどまっていることである。そしてそのために、先の重要な事件においても、読者は、Rico が手綱で St Mawr を無理に抑えつけているというよりも St Mawr が如何に危険な恐しい馬であるかという印象の方を強く受け取り、Lawrence の意図した意味、すなわち Rico が St Mawr の自然な肉体的衝動を抑圧ないし歪曲したのであり、St Mawr が Rico および Fred を傷つけたのは言わば創造的な破壊であるという意味はそれほど強く読者に訴えて来ないのである。

もうひとつの重要な問題はヒロイン Lou と St Mawr の関係についてである。彼女は、前に述べたように、最初の出合いで St Mawr の危険な性質を感じ取り、また厩舎の持主からこの馬が「特別な触り方」を必要とする「特別な馬」であるという警告を受け、さらにこの馬が実際に人間に致命傷を与えた馬であることを承知の上で、この馬を夫 Rico の馬として買い求めている。もちろん、彼女が St Mawr に魅せられるのはその肉体が「生き生きとした熱い生命」そのものを体現しているように彼女に思えるからであるが、同時に St Mawr が危険な悪魔的な力を感じさせることが彼女がこの馬に取り憑かれる大きな要因になっていることも否定出来ないのである。そのことは彼女が最初に見るヴィジョンの中で St Mawr が次のように描かれていることによって知ることが出来る。

... the large, brilliant eyes of that horse looked at her with demonish question, while his naked ears stood up like daggers from the naked lines of his inhuman head, and his great body glowed red with power... He was some splendid demon, and she must worship him.

そしてこれに続いて Lou の反応が次のように描かれている。

She hid herself away from Rico. She could not bear the triviality and superficiality of her human relationships. Looming like some god out of the darkness was the head of that horse, with the wide, terrible, questioning eyes. And she felt that it forbade her to be her ordinary,

commonplace self. It forbade her to be just Rico's wife, young Lady Carrington, and all that.

It haunted her, the horse. . . She felt it put a ban on her heart: wielded some uncanny authority over her, that she dared not, could not understand. . . Master of doom, he seemed to be! 21

このヴィジョンの第一義は St Mawr が Lou に対して彼女の生活が無意味であることを啓示する点に認められる。しかし St Mawr に対する Lou の反応に注目すれば、このヴィジョンは彼女自身の内心の欲求が形を取って現れたものと解することも可能である。彼女が St Mawr を「宿命の支配者」であるかのように感じ、一種の強迫観念に囚われているのは、とりもなおさず、現在の生活から脱け出したいという彼女の渴望が St Mawr の悪魔的な力に身をまかせたいという危険な衝動にまで高まっていることの現れであると言い得るだろう。そのように考えることによってはじめて「あのすさまじい馬の薄闇の世界」のために夫の Rico を「犠牲」にしてもいいという彼女の気持も理解出来るのである。彼女がまた「山猫」のような眼をした Lewis や「貂」のような目付きの Phoenix が自分のまわりに居る時に「楽しい」気分になるのも、彼らが彼女に現実の生活からの解放感を与えるからであろう。従って、St Mawr, Lewis, Phoenix という「別世界」を暗示する存在はいずれも、言わば彼女の英国での生活を脱出した²²という渴望によって、その積極的な存在意義を持つとも言えるのである。彼らがアメリカにおいては彼女にとって全く意味のない存在に変わってしまうのはそのことの例証である。St Mawr は過去の「幻影」(illusion)として忘れられ、また Phoenix は彼女に「さかりのついたねずみ」としか感じられなくなるのである。²² もちろん、St Mawr, Lewis, Phoenix の最も重要な意義は彼らの中で「自然の生命」が生きっていると Lou に感じられる点にあるが、彼らの存在意義を以上のように解釈することも可能であり、St Mawr と Rico の事件において St Mawr に与えられている創造的な破壊性は Lawrence の意図して

いるようには強い意味を持ち得ないのである。

アメリカへ帰国した Lou はテキサスの人間の生活が「映画心理」(film-psychology) に毒された「安物の鏡」の中での生活としか見えず、これに比べれば英国の方がまだ「現実的」(real) であると思う。ここでも彼女は英国に居た時と同じ問いを発ししなければならないのである — What was real? What under heaven was real? ²³ 彼女は St Mawr と Lewis をテキサスに残し、自分と母親のための隠遁の場所を求めて、ニューメキシコの山岳地方にある小農場を探しに行く。その途中、彼女はこの土地の風景の中に St Mawr が体現していた「自然の生命」が生きていることを感得し、同時に自己の生活のあるべき姿を見い出すのである。

... after all, it seemed to her that the hidden fire was alive and burning in this sky, over the desert, in the mountains. She felt a certain latent holiness in the very atmosphere, a young, spring-fire of latent holiness, such as she had never felt in Europe, or in the East. ²⁴

この引用文中の「隠火」が St Mawr の両眼の中に Lou が見た「黒い火のような流れ」と照応していることは言うまでもないだろう。彼女は「(古代ローマの) ウェスタの処女」(the Vestal Virgins) のように、この「隠火」—「永遠の生命」(the eternal life) に仕えることが自分の使命であると感じる。²⁵そしてロッキー山脈の荒涼とした自然の中に潰れかかった小さな農場を見つけた途端、彼女は「これこそ自分の望んでいた場所である」と独語するのである。

この小農場の歴史、すなわち「ロッキー山脈の荒々しい心臓部への人間の最後の努力」の歴史として描かれている十ページ余りは St Mawr の啓示した「別世界」— 原始的異教世界の現実の描写であると言えるだろう。読者はこの部分を通して Lawrence が原始的自然の有り様をどのように眺め、また人間がそういう場所で生きることに対して彼がどのような意義を与えているかを知ることが出来る。最初にこの農場を開拓したのは東部から黄金を求めてやって来た学校教師で

あるが、彼の努力は丸太小屋と闘い、それに牧草地を作るだけに終る。彼は開拓に用いた借金のために農場を売り払わねばならなかったのである。これを買取った商人は、灌漑に成功し、開拓地を拡張し、さらに五百頭の山羊を飼うまでになる。しかし五、六年にわたる彼の努力もそこまで限界であり、やがて蠅による疫病、鼠や黒蟻の群れ、毒草、また雷や干害によって彼の生活は破壊されてしまう。Lawrence の描くこの土地の自然は人間の創造への努力を空しいものにしてしまうその非人間的な残酷さに特徴がある。

Always, some mysterious malevolence fighting, fighting against the will of man. A strange invisible influence coming out of the livid rock-fastnesses in the bowels of those uncreated Rocky Mountains, preying upon the will of man, and slowly wearing down his resistance, his onward-pushing spirit. 26

では、このような「悪意」の存在さえ感じられる非人間的な世界の中で生きることの意味は何であるのか。それは商人の妻、ニューイングランド女性の宗教的な情熱に支えられた生活を通して明らかにされる。彼女は農場を「自分の家庭」と見なし、丸太小屋のまわりに白い塀を建てさせ、台所の真鍮の水栓をいつも輝やかせ、また台所の外には菜園を拵え、二つの小屋の間の松の木の下に小さな噴水の付いた池さえ作ろうとする。この彼女の努力を促すのはこの農場から遠くに眺められる風景の壮大な美しさである。

The landscape lived, and lived as the world of the gods, unsullied and unconcerned. The great circling landscape lived its own life, sumptuous and uncaring. Man did not exist for it.

And if it had been a question simply of living through the eyes, into the *distance*, then this would have been Paradise, and the little New England woman on her ranch would have found what she was always looking for, the earthly paradise of the spirit. . . The New England woman had fought to make the nearness as perfect as the distance: for

the distance was absolute beauty. 27

しかし彼女もまた「この土地の霊の中に潜む人間を卑しくする悪意」の犠牲になり、彼女の「地上の楽園」への努力は無惨に挫折するのである。彼女は自己の生活の基盤になっている信仰までも打ち砕かれてしまう。嵐の後、雷のために幹に亀裂の入った松の木を見つめながら、彼女は我知らず「ほとんど野蛮に」呟く。

There is no Almighty loving God. The God there is shaggy as the pine-trees, and horrible as the lightning. . . What nonsense about Jesus and a God of love, in a place like this! This is more awful and more splendid. I like it better. 28

そして彼女の農場に対する愛情はやがて「一種の嫌悪」（a certain repulsion）に変わってしまい、彼女はこの農場を立ち去ることを「喜び」をもって自分自身に認めるのである。Lawrence はこの人間の原始的な自然に対する戦いの歴史を次のように締めくくっている。

The seething cauldron of lower life, seething on the very tissue of the higher life, seething the soul away, seething at the marrow. The vast and unrelenting will of the swarming lower life, working for ever against man's attempt at a higher life, a further created being. . . The gods of those inner mountains were grim and invidious and relentless, huger than man, lower than man. Yet man could never master them. 29

このように Lawrence が小農場の歴史を通して描いている原始的な自然はその強力なエネルギーによってそれ自体の生活を生き、そこでは「それぞれの生きものが自然のままそれ自身の自我に制限されてしまい」、「人間の高等生活への試み」すなわち「文明」への努力は無惨な失敗に終る他ない非人間的な世界である。「世界は究極的に愛のために存在するという信仰」のもとに「地上の楽園」を建設するべく怒りしたニューイングランド女性は、この原始的な自然の中に「冷酷で、厭うべき、残忍な」神々の存在を認めねばならなかったのである。彼女は

この神々を恐れ、ジャムを作るために野性の木いちごを摘み取る時にも、自分が「盗み」を働いているという意識から逃れることが出来なかったのである。³⁰

しかし Lawrence はこの原始的自然に対する人間の「敗北の歴史」³¹に対して次のような観点に立って、極めて積極的な意義を与えようとしている。

Every new stroke of civilization has cost the lives of countless brave men, who have fallen . . . in their efforts to overcome the old, half-sordid savagery of the lower stages of creation, and win to the next stage.

For all savagery is half-sordid. And man is only himself when he is fighting on and on, to overcome the sordidness.

And every civilization, when it loses its inward vision and its cleaner energy, falls into a new sort of sordidness, more vast and more stupendous than the old savage sort. An Augean stables of metallic filth.

And all the time, man has to rouse himself afresh, to cleanse the new accumulations of refuse. To win from the crude wild nature the victory and the power to make another start, and to cleanse behind him the century-deep deposits of layer upon layer of refuse: even of tin cans.³²

ここで英国によって代表される現代の文明社会が糾弾され、また同時に Lou が取るべき道が示されていることは言うまでもないだろう。彼女は「新たな出発をするために」、ニューイングランド女性の後を追って、原始的自然の中で鼠や黒蟻といった「下等な」生きものと戦わねばならないのである。それが彼女の見た「悪のヴィジョン」の中で唯一つ救済の道として指し示された生の在り方の現実である。潰れかかった小農場 Las Chivas に住み着く決意をした Lou は結びの母親との会話の中で次のように述べる。

I am here, right deep in America, where there's a wild spirit wants me, a wild sprit more than men. And it doesn't want to save me either. It

needs me. It craves for me. And to it, my sex is deep and sacred, deeper than I am, with a deep nature aware deep down of my sex. It saves me from cheapness, mother. And even you could never do that for me. 33

原始的な自然の中で隠遁生活を送ることによって **Lou**が英国という文明社会の「安価さ」から救われることは可能であるかも知れない。しかし彼女が「悪意」さえ存在する非人間的な世界との戦いによって新しい出発のための「勝利と力」を獲得することは、ニューイングランド女性の生活に照らせば、不可能である。**Lawrence** が先の観点を挿入することによってこの **Lou** の決意に肯定的な響きを与えようとしていることは明白である。しかし読者は、彼女の生の甦りへの希求は認めながらも、彼女に対して母親 **Witt** 夫人が吐く皮肉な言葉を全く無意味なものとして打消してしまうことは出来ないのである。

‘How much did you say you paid for Las Chivas?’ she asked.

‘Twelve hundred dollars,’ said Lou, surprised.

‘Then I call it cheap, considering all there is to it:even the name.’ 34

St Mawr はこのように作者の意図を作品が裏切っている非常に興味深い作品である。種馬 **St Mawr**に「自然の生命」を体現させ、この馬と **Rico** を対比的に描くことによって英国社会の不毛性を描き出すことに **Lawrence** はある程度成功していると言えるだろう。しかし先に述べたように、彼が英国社会をアプリオリに断罪の対象として扱っているために **St Mawr**が言わば英国社会を攻撃するのに利用されているようにも読み取れ、そのために **St Mawr**の象徴的な意義は弱められていると言わざるを得ないのである。また **Lawrence** が結末の **Lou**の決意に極めて積極的な意義を与えようとしていることには無理がある。なぜなら彼が自己の体験に根ざした鋭い洞察によって描き出した原始的な自然は非人間的にその本質の特徴があり、そこでは人間のあらゆる創造的な努力が挫折せざるを得ないからである。最後の **Lou**の決意の言葉は、はじめに述べた、自然の生命との有機的な関係への **Lawrence** 自身の渴望が投影されたものとして受取る以外にないのである。

1. *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*, ed. Edward D. McDonald (London: William Heinemann, 1936), pp. 142-44.
2. *Ibid.*, pp. 146-47
3. *Ibid.*, p. 144.
4. *Ibid.*, p. 99.
5. *Mornings in Mexico and Etruscan Places* (Penguin Books, 1960), p. 55.
6. R. E. Pritchard, *D. H. Lawrence: Body of Darkness* (London: Hutchinson University Library, 1971), p. 163. 参照。
7. Keith Sagar, *The Art of D. H. Lawrence* (Cambridge: Cambridge University Press, 1966), p. 150 参照。
8. *St Mawr and The Virgin and the Gipsy* (Penguin Books, 1950). pp. 25-26.
以下 *St Mawr* とする。
9. Pritchard, p. 157. 参照。
10. *St Mawr*, p. 18.
11. Pritchard, pp. 157-58. 参照。
12. *St Mawr*, p. 20.
13. *Ibid.*, p. 23.
14. *Ibid.*, p. 27.
15. *Ibid.*, pp. 56-57.
16. *Ibid.*, p. 77.
17. *Ibid.*, p. 79.
18. *Ibid.*, pp. 86-92. 参照。
19. *Ibid.*, pp. 31-33. 参照。
20. *Ibid.*, pp. 113-16. 参照。
21. *Ibid.*, pp. 22-23.

22. Ibid., p. 144.
23. Ibid., p. 138.
24. Ibid., p. 147.
25. 'I am one of the eternal Virgins, serving the eternal life.' Ibid., p. 146.
なお Heinemann 版では '... serving the eternal fire' となっているが、
ここでは Penguin 版に従った。 *The Short Novels of D. H. Lawrence*,
Vol. II (London: Heinemann, 1950), p. 129. 参照。
26. Ibid., p. 151.
27. Ibid., p. 155.
28. Ibid., p. 156.
29. Ibid., p. 159.
30. Ibid., p. 158. 参照。
31. F. R. Leavis, *D. H. Lawrence: Novelist* (Penguin Books, 1964), p. 255.
32. *St Mawr*, p. 160.
33. Ibid., p. 165.
34. Ibid.

